ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の構成概念
ーストレングスとパワーに着目してー

西梅　幸治[1]

(2014年９月30日受付，2014年12月18日受理)

The Components of the Empowerment Practice in Social Work
Focusing on Strengths and Power

Koji NISHIUME[1]

(Received: September 30. 2014, Accepted: December 18. 2014)

要　旨

ソーシャルワークにおいて，中核となる理念として定着しているエンパワメント概念は，その方法論を確立することが求められている．しかしながらその課題の１つは，理論に基づき実践過程を展開することである．そこで本稿では，ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践を構成する概念のうち，ストレングスとパワーに着目して，両者の概念特性について検討を行った．その際にはまず，エンパワメント実践を形成する中心的な概念である両者の特性を先行研究の文脈から整理した．そのうえで両者の関連性，理論的背景に示唆を得ながら，比較をとおしてそれぞれの概念特性を明確にした．

キーワード：ソーシャルワーク，エンパワメント実践，ストレングス，パワー

Abstract

Recently, the empowerment in social work has been established as a core concept, and this will require academics to build its methodology. However, one of the issues is to build the empowerment practice process based on the theory and theoretical framework. Therefore, the purpose of this paper is primarily to analyze the concepts of strengths and power, which are mainly components of the empowerment practice in social work. For that purpose, the peculiarities of their concepts were described through the contexts of the previous research. In addition, it has become clear the peculiarities of them by comparing while getting a suggestion from the association with each other and theoretical background of empowerment practice.

Key words: social work, empowerment practice, strengths, power

1　高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・准教授・博士（福祉社会学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, the University of Kochi, Associate Professor (Ph. D.)

Ⅰ．はじめに

わが国におけるソーシャルワークの実践現場では，ストレングスやエンパワメントが日常的に活用される用語となってきている．エンパワメントは，1976年にSolomon, B. B. によってアフリカ系アメリカ人とソーシャルワーカーとの実践活動をとおして提唱されたことが契機で，ストレングスについては，1980年代に，精神障害のある人々へのケアマネジメントにおいて提起されたことが定説となっている．この両概念は，国際的にもソーシャルワークの中心的なテーマとして位置づき，社会福祉を巡る様々な分野や領域で，実践が積み重ねられている状況にある．しかし一方で理論との乖離が未だに問題視される状況下においては，改めてその実践活動をふり返ると同時に，理論の体系化に向けた精緻の必要性が今なお指摘されている．理論に基づき実践を展開しながら，その活動を評価する循環的な作用を通じた方法論の確立により，社会福祉サービスを活用する行動主体としての利用者の自己実現や生活の質向上，さらには社会正義の促進というソーシャルワークの目標達成に寄与することが求められているといえよう．

ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践に関する理論化や体系化に向けた課題の一つとしては，その実践を構成する概念に混乱がみられることがある．例えば久保（2000：131-132）は，エンパワメントが着目するパワーレスネスが種々のレベルで起こるため，多様な介入のレベルを志向するが，その実践の基礎が確立しておらず，パースペクティブの拡散を招き，概念的混乱をもたらしていることは否定できないと指摘している．そのためエンパワメントの特徴的な概念であるストレングスやパワーについても，その示す内容や概念間の関係性があいまいなまま，実践適用がなされているといえよう．

そこで本研究では，ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践を構成する中心的な概念であるストレングスとパワーに着目し，その特性を両者の比較も含めながら分析・検討してみたい．具体的には，ソーシャルワークやエンパワメント実践に関連する文献を中心に，まずその概念の特性を整理する．そしてその概念間の関連や理論的背景をふまえ，比較をとおして両者の概念特性を明確にしていきたいと考えている．

Ⅱ．ストレングス概念の特性

1．ストレングス視点の導入背景

昨今，ソーシャルワークにおいて大きな注目を浴びているストレングス概念は，その導入時に従来までの援助とは異なる見方，すなわち視点を提示することに強調点があった．ストレングス概念を視点として位置づけた見方は，ストレングス視点として今日理解されている．ソーシャルワークでは，視点によって捉える焦点が大きく変わり，その見方に応じて知識が形成・活用され，方法として具体化，さらには専門性が蓄積されることになる．そしてその専門性により，支援の方向性を定め，実践を展開することが可能になる．ストレングス視点の重要性を早期に提起したWeickら（1989）は，すべての人々が広範囲の才能や力量，能力，資源，向上心を所有すること，ストレングス視点が人々の表現する肯定的な態度・能力の適用や個人と社会資源が発達・維持され得る手段に基づくこと，そして価値や信念を反映していることを強調している．

またSaleebey（1996：296）は，ソーシャルワークにおけるストレングスを基盤とした見方の進展が，ある部分で米国の文化及び，個人や家族，コミュニティの病理，欠陥，問題，異常，迫害，障害を基盤とする心理社会的アプローチが援助専門職に浸透していることへの気づきから生じていると指摘している．従前の援助の視点としては，利用者の問題を彼（彼女）の内的な精神病理に焦点化し，治療に重点をおくことによって専門性を強調した病理・欠陥的視点[1]が主流を占めていた．そのためストレングス視点から実践することは，例えば統合失調症や子どもへの性的虐待，膵臓が

ん，暴力などの現実の問題を，ソーシャルワーカーが無視することを要求しないが，同様に可能性を否定することは不適切であり，精神病理学に支配され，虐待などの犠牲者としてのみ理解し，トラウマや痛みによって必ず能力が奪われるという考え方を否定する（Saleebey 1996：297）．

このストレングス視点により，従来の病理，リスク，機能不全へ視点を向けるというよりはむしろ，逆境に直面しての回復力と，クライエントが対処し，生き抜き，成長する多くの方法に，ソーシャルワーカーは関心を寄せることになった（Kemp ら＝2000：62）．そしてストレングス視点は，通常・非常に関わらず，状況と変化への可能性に対処する能力を高めることに焦点化すると指摘されている（Timberlake ら2008：３）．このストレングスへの焦点化については一方で，病理・欠陥的視点，医学（病理）モデル，問題解決アプローチなどとの対比により，ストレングス視点やモデル，そしてアプローチを強調する立場がある（例えば Saleebey 1996;Rapp ら2006；Early ら2000）．また他方では，対比というよりはむしろ従来の実践に，ストレングス視点を組み込む，リスクとストレングスを等しく考慮する，問題とストレングスへ２重に焦点化することを強調する立場もある（例えば Graybeal 2001；Gilgun1999; Timberlake ら2008）．

このようにストレングスへどのように焦点化していくかについては，議論の余地が残されているが，特に Rapp ら（2006）は，ストレングスモデルが精神保健領域やソーシャルワーク，その他の援助専門職のなかでパラダイムの転換としての意義があると言及している．彼によると，パラダイムとは世界を理解し，問題を解決するモデルや方法である．ストレングス視点は，ソーシャルワークへの導入に積極的な論者により，従来のパラダイムとしてソーシャルワークを形成してきた病理・欠陥的視点からのモデルやアプローチのアンチテーゼとして，その意義を強調されることとなったといえよう．

２．ストレングス概念の特徴

利用者のストレングスは，変化に向けて機能する際の資源として，肯定的な傾向にしながら成功への期待をもたらす現代ソーシャルワークにおけるアプローチの焦点である（Miley ら2007）．すなわちそれは，個人，家族，コミュニティが直面するあらゆることが状況や抑圧，トラウマによって打ち砕かれ，歪められたとしても，それらの能力，才能，社会的自律性，可能性，洞察力，価値観，希望に照らして理解できることを示している（Saleebey 1996：297）．

このストレングスとは，例えば Kemp ら（＝2000: 62）によると，クライエントやコミュニティが有する肯定的な属性，資源，能力，可能性，力量を示す．そして Miley ら（2004：215）によれば，生来の才能，習得した能力，日常生活で発達させたスキルなど，私たちがうまくできるものであり，私たちにとって明らかである特性，能力，行動などを含むだけではなく，かすかな成功や明らかでない将来性をも含み，解決を進める根源であると考えられている．また Early ら（2000：124）は，ストレングスを生きてきた自負，将来への希望，人のニーズや見方を理解する能力，個人や家族のゴールについて認識し，選択する能力を含むと指摘している．そしてそのストレングスを見出すためには，利用者と共に状況，希望する結果，そしてゴールの追求や結果を生み出す方法へのアイデアに関する彼女，もしくは彼の定義を分かちあうことから始まると理解されている．さらに Rapp ら（2006）は，人間と環境の両側面を見通しながら，願望，能力，自信，資源，社会関係，機会のような強みを認識し，望まれる結果を導くことを強調している．

一方で Glicken（2004）は，従来の DSM-Ⅳのように利用者の障害や欠損に焦点づけた診断ではなく，利用者のより肯定的に機能している部分をストレングス視点から尺度化するために45種類の肯定的な行動[2]を提案している．このようなストレングスに関して，McQuaide ら（1997：211）

は利用者の所与の特徴がストレングスとなるか，弱さを示すかについては，生育歴の機微，身近な社会環境，より大きな社会基盤，利用者の特徴の組み合わせ，挑戦の機会，そして利用者の経験や状況に基づく意味づけに依存していると指摘している．この指摘からは，ストレングスが単純に弱さの対ではなく，相対的な側面があることや利用者がおかれている状況や文脈，そしてそれに対する意味づけに大きく関わることが理解できる．

以上のようにストレングスは，個人のみならず，家族やグループ，コミュニティも保有するものとされ，あらゆる利用者システムや生活のなかの資源にも拡大して用いられている．そしてそれらの利用者の個別・主観的で肯定的に意味づけられ，認識されている，もしくはされ得る属性を示す．その属性は，利用者自身の特徴や環境との相互作用により，相対的側面を保持することが特徴であるといえよう．

3．ストレングス概念を用いた支援特性

利用者のストレングスを見出すストレングス視点は，人間の価値と社会正義についてソーシャルワークの専門的価値と調和し，それを具体化するために不可欠である（Mileyら2007：81）．従前の利用者の問題を彼（彼女）の内的な精神病理に焦点化し，治療に重点をおくことによって専門性を強調した病理・欠陥的視点及び，その視点からのモデルや問題解決志向のアプローチと，利用者の強さや可能性に重点をおくストレングス視点とストレングス志向のモデルやアプローチでは支援の方向性が大きく異なる．この両者の支援の違いについては，例えば表1～3[3]のように視点，モデル，アプローチの点から指摘されている（Saleebey 1996；Nelson-Beckerら2006；Earlyら2000）．

まず病理・欠陥的視点やその視点からのモデルや問題解決志向のアプローチの特徴をみていきたい．Saleebey（1996）によると，表1では伝統的な病理に基づくものとストレングスに基づくものとのアプローチの違いが示されている．この指摘を具体的な手続きというよりはむしろ，視点としてみていくと，病理・欠陥的視点に基づく場合，個人の病理や問題に焦点化し，専門家主導で診断・治療を実施することによって，問題を減少さ

表1　病理とストレングスの比較

病理	ストレングス
人は，ケースとして定義され，症状は診断される．	人は，個性的であると定義され，特質，才能，資源はストレングスとなる．
セラピーは問題に焦点化される．	セラピーは可能性に焦点化される．
個人の評価は，専門家による再解釈を通じた診断によって促進される．	個人の評価は，その人を知り，よさを認めることが重要となる．
実践家は，個人的なストーリーや理由づけには懐疑的である．	実践家は，個人のあらゆる面を知ろうとする．
幼少期のトラウマは，成人の病理の前兆であり，予測因子である．	幼少期のトラウマは，前兆ではなく，個人を弱めるかもしれないし，強化するかもしれない．
治療的な業務の中心は，実践家によって考案される治療計画に基づいている．	業務の中心は，家族，個人またはコミュニティの望みである．
実践家は，クライエントの生活の専門家である．	個人，家族，コミュニティは，専門家である．
選択の余地，コントロール，関与，そして個人の発達の可能性は，病理によって制限される．	選択の余地，コントロール，関与，そして個人の発達の可能性は、開かれている．
業務のための資源は，専門職としての知識と技術である．	業務のための資源は，個人，家族またはコミュニティの強さ，能力と適応に向けたスキルである．
援助は，症状の影響と，行動，感情，思考または関係における否定的な個人的，社会的結果を減らすことに集中する．	支援は，生活を継続すること，価値や責任の確認と進展，コミュニティやそのなかでのメンバーシップの創造，発見に集中する．

せる援助を展開することになることが分かる．またNelson-Beckerら（2006）によると，表2のように高齢者とのケースマネジメントにおける病理／リハビリテーションモデルの特徴が示されている．そこでは，実践の価値基盤，知識基盤，そして技術基盤を示すことによるモデル解説がなされている．特に医学知識とそれに基づく治療をとおして，クライエント個人の問題を評価，病理や欠損を診断し，その解決のために治療が提供される援助過程と，クライエントの受動性が明らかにされている．このような展開は，Earlyら（2000）も同様であり，表3のように初期接触から評価基準への過程が病理・欠陥的視点に基づく問題解決アプローチの特徴から整理されている．そのアプローチも，明確化し定義された問題の解決に向けて，その要因を特定し，ソーシャルワーカーの専門的知識，機関の役割や構造，そして利用者の能力によって制限を受けながら実行可能な解決策を選択して展開される．またその評価は，客観的立場から行われると述べられている．

一方でストレングス視点やその視点からのモデルやアプローチは，次のような特徴を保持している．Saleebey（1996）によると，表1のようにストレングス視点から，個人の強みや可能性に焦点化し，利用者主導で希望に則した支援を，生活の継続や創造に向けて展開することになる．また表2では，Nelson-Beckerら（2006）により，実践の価値・知識・技術基盤にそれぞれ，利用者の成長，回復，学習への可能性，決定への能力と権限があること，利用者の知識とコミュニティの潜在的資源を積極的に活用すること，そしてラポールと協働を重視し，本来の支援ネットワークや日常的なサービス提供により実践することが指摘されている．最後にEarlyら（2000）も表3のように，利用者の見方や希望を創造・促進し，状況を意味づけながら目標を明確化する．そして，肯定的な行動や状況をアセスメントしながら，内的，外的，創造的，自然発生的な資源を明確化することに焦点をおいた戦略を協働で探求し，介入を行う．またその評価は，利用者の主観的な立場から連続的に行われることが言及されている．特に協働でストレングスを見出すためには，ストレングスに関する対話や解決志向のアプローチによる支援の重要性が同時に強調されている．

表2　病理／リハビリテーションモデルと対比されたストレングスに基盤をおいたモデル

要因	ストレングスモデル	病理／リハビリテーションモデル
価値基盤：普遍的哲学的	高齢者は，成長，回復，学習への可能性があり，ニーズや要求を確認する能力を保持し，環境のなかのストレングスや資源と同様に独自で固有な個々のストレングスを備えている．	医学界は，問題を確定するための最高の見地を保持し，高齢者は、臨床試験と医学知識によって定められた治療に従わなければならない．
価値基盤：文化的	クライエントは，利用者であり，高齢者には最もよい解決策を決定する能力と権限がある．	クライエントは患者で，サービスの受動的な受取り手であり，法則定率的でパターナリスティックな社会は，身体的能力の低下と向き合う高齢者のケアをしなければならない．
知識基盤：	ケースマネジャーは，利用者との関係を通じて，変化に向けた人間の能力への理解と資源についての知識をもたらす．	医学界は，生物学的知識と健康に関する知識の管理機関であり，ゲートキーパーである．
知識基盤：問題解決	利用者は，意思決定能力があり，利用者の知識とコミュニティに本来備わっている資源は、最初に活用され，他の資源は，必要に応じて探求される．	問題解決は，膨大な量の情報を統合する専門知識と能力に依存している．
技術基盤：普遍的	専門職はラポールと信頼を進展させ，利用者と協働し，利用者がゴールを達成することを支援するために，自身の資源と環境のなかの資源を結びつける．	専門職は，個人の問題の性質を評価して，診断と治療を提供する．
技術基盤：ケースマネジメント	ケースマネジャーは，指導，支援し，そして励まし，可能な場合には自然に手伝い，また本来の支援ネットワークを回復，創造し，日常業務のなかでサービスを提供する．	専門的な接触は，機能をアセスメント，プランニング，評価することに限定され，確認された問題は医学的に管理され，患者は，欠損を克服するために必要なスキルを教えられる．

表3　問題解決とストレングスアプローチの焦点の比較

支援過程	問題解決アプローチ	ストレングスアプローチ
初期接触	問題を明確化し定義する． 利用者やソーシャルワーカー，重要なシステムが問題の定義に貢献する．	未来に向けた利用者の見方や希望を定義する．その見方や希望は，利用者と一緒に創造する．
目標の明確化	目標は，利用者やソーシャルワーカーの問題に対する解決策と解決を促進する機関の役割から決められる． 目標は，機関の役割や構造，利用者の能力によって制限される．ソーシャルワーカーは，支援過程を具体化する．	目標は，積極的に利用者の見方や定義，状況への意味づけを通じて決められる． 目標は，利用者とソーシャルワーカーの想像力により制限される．ソーシャルワーカーは，ストレングスや潜在的な能力を引き出し，創造的な考え方を促進する．
アセスメント	クライエントのニーズや問題に関連した要因を，問題を基盤に明確化する． アセスメントは，資源とストレングスを含むが，その主要な焦点は，最も重大な問題に関連する要因を明確化し，ターゲットとすることにある．	ストレングス・アセスメントは，利用者がうまくやっていることや取り組んでいること，望ましい行動と状況の継続を容易にしていることの明確化に焦点を合わせる． アセスメントの主要な焦点は，利用者がその目標や見方に関連してうまくやっていることにある．
介入	介入方法は，共有して選択されるが，合理的で実行可能な目標を基盤におく．可能性のある解決への障壁，機関の不測事態，ワーカーの専門的知識を考慮して問題解決策を選択することに焦点をおく．	利用者が定義した目標に向けて，ストレングス，技術，知識，願望を構築することに関連する戦略を相互に練る．内的，外的，創造的，自然発生的な資源を明確化することに焦点をおいた戦略の協働的探求．
評価基準	目標の達成は，客観的な立場から問題が解決されたか，軽減されたかに基づいている．	目標の達成は，主観的な立場から利用者に連続的に再定義される．

このように病理・欠陥的視点からの問題解決という支援の方向性は，利用者がおかれている問題状況を理解・分析していくことでその原因を探り，解決に向けた手段を検討することになる．専門家の視点で利用者生活のなかでの問題点や欠陥，できていない部分を発見・定義しながら問題を特定する．そしてその改善に向けて，リスクや危険性を考慮のうえ所属機関の範囲内で，利用者の取り組みを援助する．

しかしストレングス視点に基づくと，問題を探ることは，解決に向けた一つのアプローチでしかない．利用者に問題が生じていても，その状況すべてが問題の影響を受けているのではなく，長所や可能性に結びつくような肯定的側面が必ず存在するという考え方を重視する．問題が生じているにもかかわらず，それよりもむしろ，利用者の肯定的な属性や生活の場面・機会，豊富な資源を備えた環境に焦点をあて，利用者の定義した目標を利用者とソーシャルワーカーの対話と協働によって実現することを目指す未来志向のアプローチである．以上のようにストレングス視点は，ソーシャルワークにおける価値と信念を反映し，従来の支援とは視点，関係，過程を異にする利用者の強さや長所，可能性を協働で見出していくアプローチであるといえよう．

Ⅲ．パワー概念の特性

1．パワー概念の登場背景

次に，パワー概念についてみていきたい．エンパワメント概念は，Solomon の貢献によって，ソーシャルワークのなかで今日的にも重要なテーマとなっている．パワー概念は，そのエンパワメントの中核に相当する（Boehm ら2002：449）．そのためエンパワメントの文脈のなかで，パワー概念を考える際には，エンパワメントのルーツや登場背景を理解することが手がかりとなるだろう．そこでまずエンパワメント概念のルーツについてみていきたい．

米国のソーシャルワークにおけるエンパワメントの伝統が1890年代から存在すると指摘する Simon（1994）によると，そのルーツは16世紀の宗教改革や商業資本主義，そして18世紀の産業資本主義や市民的シティズンシップの概念，ジェファーソン流民主主義，さらには19世紀の超越主義，政治的シティズンシップ，ユートピアン・コミュニティ，アナーキズム，20世紀の社会的シティズンシップであり，これらがエンパワメントの知的・政治的基盤となっている．

次に Lee ら（2011）によると，ソーシャルワークにおけるエンパワメントの歴史的な先行例としては，Addams, J. とその仲間たちによるセツル

メント活動，19世紀のアフリカ系アメリカ人に対する一般的には認知されていない女性クラブや社会改良運動，他のマイノリティによる自助グループ，初期のグループワークの理論家のCoyle, G.による進歩的グループとの実践，そしてReynolds, B. C.による急進的な精神分析志向のケースワークなどが挙げられている．

またDunlap（2011：238）によると，コミュニティの文脈において変化に向けた利用者のストレングスと能力に基礎をおくエンパワメントの運動を補強する機能主義がその源泉として十分に認識されていないことが指摘されており，機能主義の貢献も理解できる．パワー概念そのものとの関連でいえば，機能主義派のSmalley（1967：1）が，すべてのソーシャルワーカーの試みが，個人の充足と社会的な善のために個人にある人間としてのパワーや，すべての人の自己実現を最大限可能とする社会制度や社会政策，そして社会などを創造するための社会的パワーを解放することであると述べている[4]ことからも，うかがうことができるだろう．

このようにエンパワメント概念やパワー概念のルーツには，各時代の社会状況に関わる人々の活動から示唆を得たソーシャルワークの歴史が大きく関わっている．それは，Simon（1994：33）がエンパワメント概念を，各時代の活動家がそれぞれの時間と場所の要求や展望に応じて仕立てた文化的な原型から受け継がれた社会的構成物として指摘することからも理解できる．このようなエンパワメント概念にあわせてパワー概念もソーシャルワークに導入され，積極的な活用や検討がなされてきたといえるだろう．

2．パワー概念の特徴

エンパワメントと関連するパワー概念に関して，先行研究をとおしてその具体的な特徴をみていきたい．まずSolomon（1976）によると，個人のパワーは，機会，行為，もの，その他のあらゆる社会資源であり，その人のために利用され得るものとして定義されている．このパワーは，対人関係の力として多様な形態があり，特定の状況で評価されるパーソナリティの特徴や，信用，情報へのアクセス，体力，うまく話す能力，もしくは効果的に人々や資材を組織する能力，コミュニケーション・ネットワークにおける特定の地位，有力なグループや組織での人望，他の業務に就くことができる技術力などを含む．そしてこれらのすべてやパワーのより多くの形態は，問題解決を探求する人々によって利用され得ると述べている．

次にGutiérrez（1991：201）によれば，パワーは，社会的相互作用の過程で生じるため、定形でないが，次の3つに定義されている．それは，①必要としているものを得る能力，②他者の考え，感情，行動，信念に影響を与える能力，③家族，組織，地域，社会のような社会システムのなかの資源分配に影響を与える能力である．そしてエンパワメントは，個人が自身の生活の改善に向け行動を起こすことができるように，個人的，対人的，政治的なパワーを増していく過程としてパワー概念を用いて定義されている．

またMileyら（2013）によると，パワーは情報にアクセスすること，多くの可能性から行為を選択すること，選択したことについて活動することを意味する．そしてパワーが対人的，社会的，文化的な文脈のなかでの相互作用により維持，もしくは減少し得るため，パワーの行使に関しては環境への留意が必要となる．同様にパワーの環境との関わりを指摘するHepworthら（1997：460）によると，エンパワーすることによって，利用者のニーズ充足，幸福，そして満足感を高める方向で，利用者が環境と相互作用する能力を獲得，もしくは回復できるように意図することが重視されている．そしてそこでのパワーの感覚は，コンピテンスや自尊心，支援システム，そして個人の行為，もしくは他者と協力する行為が生活状況の改善に通じるという信念と密接に関連していることを示唆している．

さらにMiller（1991：198）は，パワーについて変化を生み出す能力として定義している．そしてその人の自身の考えまたは感情，時に非常に強力な行為の変化や，経済的，社会的，政治的な領域などより大きな対人関係の場において運動を起こすために活動することも含むと理解されている．Pinderhughes（1983）もパワーを定義することは難しいとしながらも，人間の行為の側面であり，自身が恩恵を受ける生活空間に作用する力に影響を及ぼす能力として定義している．そして人間の機能のあるレベルにおけるパワーの存在が別の機能レベルのパワーの存在に影響すると述べている．

このようなパワーについては，一方で多様な側面があることが指摘されている．例えばエンパワメントを利用者システムがその状況をコントロールできるようになることとして定義したAdams（2008）は，社会科学において異なる理論的背景からパワー概念が発達したこと，社会の様々な地域で独自に共有されるが理想としてはより等しく共有されると仮定する傾向にあること，パワーの行使について詳細に説明・分析されるが人々は別の方法で生活や労働への満足を得るかもしれないことにより，パワー概念が肯定的にも否定的にもなることを指摘している．そのうえでパワーの特徴を次のように示している．

・パワーは，能力や動機づけの要因として個人のなかで経験される．これは，私たちの属性やスキルを利用する方法，ある種の個人の資源に関する資本を意味する．
・パワーは，一個人から他者に対して，支持もしくは保護という言葉で肯定的に，もしくは強制や乱用という言葉で否定的に行使される．これは，身体的，情緒的，もしくは心理的であるかもしれない．
・パワーは，ある人やグループが他よりも所有するというように，異なる人々に異なる形で分配される．そしてグループのなかで一緒に行動することによって集団的パワーが蓄積され，表明される．
・パワーは，何かが起こらないようにする予防的な形態であるかもしれない．

またThompson（2007：17）も同様に，4種類のパワーが存在することを指摘している．そのパワーについては，“power to”“power over”“power with”“power from within”として整理されている．その内容は，以下のとおりである．

・power to：人々がゴールを達成するための能力と関係する．専門的観点からは，例えば人々が潜在能力を開発するための障害を認識し，取り組むことへの支援など，潜在能力を最大化するための基礎として理解できる．
・power over：優劣関係のような不平等なパワー関係を説明するために用いられる．これは，社会的に適法（例えば子どもの保護）とされる方法で生じ，権限の行使として認識される．優劣関係が社会的に適法でない場合（人種差別など）や，合法的な権限を乱用，もしくは誤用する場合（警察官による必要のない強制力の使用）に生じると，これは抑圧に等しい．
・power with：これは，パートナーシップや集団的アプローチを基盤としている．一緒に取り組むことや，そのために他者を励ますことによって，一人で取り組んだり，お互いに争うよりも多くのことを達成することができる．
・power from within：資源の概念といくつかの点で密接に関連し，個人的，もしくは内的な資源を含んでいる．それゆえ，自身が利用することができ，他者が利用するように支援することができるストレングスやレジリエンスと関係する．またスピリチュアリティの概念（生活のなかでの意味づけや傾向，関連性の発見）や本来性の概念（自己欺瞞の回避）とも密接に関連している．

このようにみていくと，パワー概念には，多様な形態があるが，特徴として利用者システムが環

境との相互作用をとおして，内的もしくは他者や家族，地域，社会などの外的なシステムに影響を与え変化を生み出す，他者と共有可能な能力や資源である．そして特に問題解決や生活状況の改善という目的に応じた個人的，対人的，政治的な行為や活動に関連している．またフィードバックを含めた利用者自身の資源の要因となり得る特徴を保持しているといえるだろう．

3．パワー概念を用いた支援特性

Solomon（1976）は，エンパワメントを，スティグマ化されている集団のメンバーであることに基づく否定的評価によって生み出されたパワーの欠如状態を減らすことを目指す，利用者もしくは利用者システムとの諸活動に，ソーシャルワーカーが関わっていく過程であると定義した．そしてスティグマ化された社会的カテゴリーに属する人々が対人関係において影響を与え，社会的に価値ある役割を遂行するためのスキルを，支援を受けて発達，拡大させる過程に関連すると指摘している．

またSolomonは，利用者のパワーの欠如状態を，価値ある社会的役割の効果的な遂行が個人の満足感に通じる際に，情緒やスキル，知識，物的資源を管理することができないパワーレスとして定義し，その状態が減少するための支援を重視している．そこでは，マイノリティの民族グループを侵害する否定的評価や差別が，生活問題を解決するためのパワーを直接的，間接的に減少させることに着目し，直接・間接的なパワーの阻害に対して取り組むことを提起している．その際には，①利用者が問題を解決する際の必然的な主体であることを自認する，②利用者が実践家を利用可能な知識やスキルを持っていると認める，③利用者が実践家を問題解決へ向けて努力する際の対等な協働者，もしくはパートナーとして認める，④利用者がパワー構造を多極的，かつ現状への関与の程度を変えるように行動し，そのことにより影響を与えられるものとして認めるように支援することを目標にしている．

次にGutiérrez（1990）によれば，エンパワメントに関連して，無関心で絶望している人が行動を起こすことができるような4つの心理的変化を説明している．それは，①自己効力感の増大，②集団意識の発達，③自己非難の軽減，そして④変化に向けた個人の責任を引き受けることである．具体的にはまず，①自己効力感の増大では，自己効力感を自身の生活において出来事を生み出し，調整するための能力への信頼とし，個人的なパワーやストレングスの発達との関連を示唆している．そして②集団意識の発達では，個人やグループ，そしてコミュニティの問題がパワーの欠乏から生じるとして再定義する社会への批判的な見方により，パワーレス状態にある人の集団意識が発達することを指摘している．また③自己非難の軽減では，意識高揚の過程と関連し，自身の問題を社会に存在するパワーの配置に帰することで，否定的な状況への責任から自由になると述べている．最後に④変化に向けた個人の責任を引き受けることについては，Freire, P.の主体化や積極的な参加者に関する概念と同様に，問題の解決に責任を持つことで，利用者がより生活を改善するために過程を通じて積極的な努力をしやすくなることが言及されている．

そしてThompson（2007）は，既述の4種類のパワーに関連してエンパワメントが現実のものとなり，可能な限り4種類を取り込むことがよい実践を促進すると指摘している．具体的な支援内容については，以下の通りである．

- power to：例えば情報を提供すること，人々が学習するように支援すること，再保証や精神的支持の提供，信頼を高めること，そして有害で抑圧された物語を書き換えることを支援することにより，潜在能力を最大にすることを必要とする．
- power over：権限を必要（最終手段，他に適した手段がない）かつ，合法的（倫理的に適切なアセスメントにより必要性について正当化されている）で，適正な（過剰反応やや

り過ぎでない）場合に用いることにより，最小限にこれを保つことを確認する．

・power with：パートナーシップによる取り組みや連帯運動を支援する．支援しようとする人々，同じ組織，もしくは組織を超えたケア職員や専門家の仲間と一緒に取り組むことは，よい実践の基本的な基準である．

・power from within：例えばストレングスを利用することやレジリエンスの開発を支えることによって，この促進に向けた重要な役割を果たすことができる．専門的な実践は，意味の発見の感覚であるスピリチュアリティに基礎をおき，人々が自身のストレングスや内的レジリエンスを利用するように支援することが寄与因子になり得る．もし“power from within”の感覚がなければ，“power to”を最大にし，“power over”に抵抗し，そして”power with”をとおして積極的な役割を果たすことに違和感をもつことになる．

一方，ジェネラリスト・ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチを提唱したMileyら（2013）は，その構成要素に，エコシステム視座の導入，社会正義への責任の反映，ストレングス志向の適用，利用者との協働，エンパワーする現実の構成を挙げ，その具体的な実践の局面と過程，そして活動を整理している．それは，対話・発見・発達からなる局面で展開される過程と，そのなかでの活動である（表4参照[5]）．

この展開過程のなかでパワーは主に，まずパートナーシップ形成の過程で，利用者がそのパワーを放棄している関係でさえ，ソーシャルワーカー中心から利用者が統制するものへパワーの配置を変えるために，ソーシャルワーカーは速やかに動き，パワーを増大させる必要があると指摘されている．そして資源の可能性をアセスメントする過程では，エコシステム視座からのアセスメントにより，利用者のパワーの源を認識することや，解決策を立案する過程での契約の際に，利用者がソーシャルワーカーとの関係のなかでパワーを経験することの重要性が述べられている．

また資源を活性化する過程では，ソーシャルワーカーが相談者，資源管理者，そして教育者の役割を果たしながら，パワーの発達に向けた戦略を用いる．そこではパワーの発達に向けて，リー

表4　ジェネラリスト実践におけるエンパワメント・アプローチ

局面	過程	活動
エンゲージメントとしての対話	パートナーシップを形成する	利用者の特権を認め，ユニークさを尊重するようなソーシャルワーカーと利用者のエンパワーしていく関係を築く
	状況を明確化する	利用者の経験を確認し，交互作用の側面を加味しながら，ゴールを見据えるための応答をとおして，挑戦している状況をアセスメントする
	方向性を定める	利用者の動機づけを活性化し，関連する資源の探求に導くための関係性に向けて予備的な目標を設定する
アセスメントとしての発見	ストレングスを認識する	普段の機能，挑戦的状況への対処，文化的なアイデンティティ，逆境の克服の際にみられる利用者のストレングスを探求する
	資源の可能性をアセスメントする	家族，グループ，組織，コミュニティの機関などとの関わりを含めた，利用者の環境との交互作用をとおした資源を探求する
	解決策を立案する	利用者と環境の資源を利用し，望むゴールを導くように行動するための達成可能なプランを作成する
インターベンションや評価としての発達	資源を活性化する	相談，資源管理，教育をとおして，利用可能な資源を動員することにより，立案したプランを実行する
	協調関係を創造する	利用者間，自然な支援ネットワーク，サービス供給システムのなかで，エンパワーするような協調関係を築く
	機会を拡大する	プログラム開発，地域組織化，ソーシャルアクションをとおして，新しい機会や資源を発展させる
	成功を認識する	成果を認識し，継続している活動を報告することで，変容に向けた努力による成功を評価する
	成果を統合する	支援関係を変え，成功を称え，肯定的な変化を安定させながら，変容への過程を終える

ダーシップの促進，選択肢の認識，真の選択肢の確認，ストレングスの拡大などの技術が用いられる．さらに協調関係を創造する過程では，ソーシャルワーカーと利用者それぞれが保持する資源のみならず，共に取り組む協働的な協調によって，第三の相乗的資源が生じる．このような協調関係によるパワーの重要性について言及されている．最後に機会を拡大する過程では，社会経済的，政治的，構造的なシステムの変革をターゲットにし，パワーの均衡を達成する集団的な活動や，望ましい成果を生み出す個人的，集団的，政治的なパワーを利用することが含まれている．

このようにみていくと，利用者が環境に向けて影響を及ぼすようなパワーの発達のみならず，ソーシャルワーカーとの協働を確立し，実践するためのパワーを考慮することの重要性が理解できる．特に後者については，Mileyら（2013：87）が利用者にとって協働は，パワーのための資源であると述べ，May, R. の研究を参考に，滋養的なパワー（他者のためのパワー）と統合的なパワー（他者とのパワー）という肯定的なパワーの表現を重視している．これらを利用者と分かち合うことで，利用者は自身のパワーに自由にアクセスすることができ，専門的な関係のなかでの協調は新しいパワーの源になることが指摘されている．この点については，Solomon（1976：107）も同様に，利用者システムをパワーとしての知識をもつ者として認めるならば，協働による問題解決過程に関与する動機をかなり向上させることができると指摘している．

またHasenfeld（1987）は，利用者とソーシャルワーカーの支援関係をパワーの依存としてみると，相互の資源の交換であり，その交換条件が各自のパワー資源によって決定される．そのためパートナーシップをとおして，パワーを分かち合うことが重要であり，ソーシャルワークにおけるパワーを適切に評価しなければならないことを指摘している．同様な観点からPoulin（2005）によると，ソーシャルワーカーは，特別な知識へのアクセスと支配に由来する専門的知識としてのパワー，対人スキルに由来する指示もしくは説得としてのパワー，承認された地位に由来する合法的なパワーを保持することへの自覚が求められている．

以上をふまえると，パワーに焦点化した支援は，エンパワメント実践過程の中核である．それは，個人，家族，グループ，コミュニティなどの利用者システムがパワーレス状況の改善や自己実現，生活の質の向上，社会変革を目指し，環境との相互作用のなかで，内的もしくは外的な他のシステムに影響を与え，変化を生み出す能力や資源を，個人的，集団的，政治的な活動により行使する過程を促進することである．またその過程を利用者とソーシャルワーカーのパワーを分かち合う協働をとおして展開することに特徴があるといえよう．

Ⅳ．エンパワメント実践における特性比較

1．ストレングスとパワーの関連性

既述したストレングス概念とパワー概念の特性をふまえ，最後にその関連性や理論的背景に示唆を得ながら，両者の比較をとおして分析することにより，エンパワメントの構成概念としての両者の特性をさらに明確にしていきたい．まずストレングスとパワーの関連性そのものに示唆を与える研究についてみていくと，Solomon（1976：6）は，パワーが対人関係的な現象であり，そうでなければストレングスと定義されるだろうと述べている．Saleebey（2006）も同様に，人々のなかにあるパワーとしてストレングスを説明している．これらの指摘からは，ストレングスを個人の特性として，パワーを対人関係の特性として理解していることが示唆される．

またCowger（1994：263）は，利用者のストレングスをアセスメントすることを重視し，そのストレングスをエンパワメントのための燃料であり，エネルギーであると指摘している．エコシステム・ストレングスアプローチを紹介している

Johnson ら（＝2004：45）は，ストレングス視点に基づくことによって，変化が可能であり，クライエントが自分自身をエンパワーできるとしている．同様に Miley ら（2007：80）も，欠陥よりもストレングスに焦点をおく実践過程は，エンパワメントを実現することを述べている．そして継続的な協働構成の過程における利用者との対話や治療的会話を重視した Greene ら（2005）も，ストレングスがエンパワメントの促進につながることを指摘している．これらの指摘からは，ストレングスとエンパワメントとの関連が深く，利用者のストレングスに焦点をおき，それを認識することがエンパワメントの促進に通じると理解できる．

さらに Gutiérrez（1990：151）は，協働的支援関係と小グループ形式の文脈のなかで，利用者をエンパワーするための技法の一つ[6]として，存在するストレングスを認識し，利用することを挙げている．その技法によってエンパワーする実践家は，利用者の現在の機能レベルや個人的，対人的なパワーの源にふれることができることを同時に指摘している．一方で山口（2009：70-71）は，ストレングスを利用者の生活体験から蓄積してきた強さや力の状態を示す概念であり，パワーを問題解決の対象に向けて発揮される力であり，行動を伴った概念として捉え，ストレングス－パワー変容過程の展開を試みている．これらの指摘からは，ストレングスがパワーに影響を与えていることが示唆されており，エンパワメントに向けて関連が深いことが改めて理解できるだろう．

2．エンパワメント実践における perspective からの示唆

次にエンパワメント概念の理論的な枠組みとしての perspective から導かれるストレングスやパワーに関する各特性を指摘する．これはいわば演繹的な側面としての理論的な特徴であり，既述した内容の整理・比較をとおして特性を導く基礎とする．この基礎を通じて，理論を背景とした特性を考察することにより，実践に適用可能な理論構築を志向していきたい．具体的にエンパワメント実践のメタファーとしての perspective には，エコシステム視座と社会構成主義的見解の包括・統合的な理解が必要である（西梅2011）．そしてその perspective をもとに，エンパワメント実践の原理・原則から導いた過程特性には，利用者の自らに働きかける自省的作用と環境に働きかける機能的作用という 2 側面の過程を推進する作用が存在する（西梅2012）．

そこではまず，利用者が環境との相互作用からなる生活をどのように理解（解釈）しているかについての自省的作用を考慮する．この社会構成主義的見解に基づく意味の側面からの作用は，自身と環境との相互作用（関係性）を問い直し，環境に働きかける機能の発揮を導く．そして人間と環境からなる生活をエコシステム視座から捉えると，その環境に働きかける機能が目的に応じて時系列的に成果をもたらしながら，状況の変容が生じることを把握できる．この自省的作用から，環境に働きかける機能への一連の流れは，包括・統合的枠組みによってこそ成り立ち，エンパワメント実践展開を導くことができる．

この包括・統合的な perspective からエンパワメント実践展開をみていくと，利用者がソーシャルワーカーとの対話をとおして自らの意識に問いかけストレングスを自覚していき，新たに生成していくことを社会構成主義的見解からの自省的作用で解説し，そのストレングスから環境に働きかけるパワーをエコシステム視座からの機能的作用で説明することができる．このような作用の特徴からは，エンパワメントを意味の次元からの時系列的な成長過程として理解することを可能にする．このようにエコシステム視座と社会構成主義的見解に基づくと，エンパワメント実践過程は，意味生成過程と状況変容過程の 2 側面に次の 4 つの要素を保持している．

①内在化された抑圧への意識を高めること（環境からの影響の自省的理解）

②独自な意味生成からストレングスを認識する

こと（自身の強さの自省的理解）

③パワーを外在化し発揮すること（環境に働きかける機能）

④マクロな社会変革まで挑戦すること（機能による社会構造の変革）

上記の4つの要素をみていくと，エンパワメント実践展開を構成するストレングスとパワーの包括・統合的な perspective からの理論的な特徴が理解できるだろう．

3．ストレングスとパワーの概念特性

以上の整理をふまえ，ストレングスとパワー両概念の特性を明らかにしてみたい[7]．まずストレングスについては，利用者の個別・主観的で肯定的に意味づけられ，認識されている，もしくはされ得る属性を示す．そしてそれを視点とするモデルやアプローチでは，利用者が環境との相互作用をとおして肯定的な意味を生成し，自らの長所や可能性，豊富な社会資源を認識できるように，対話や協働を通じたソーシャルワーカーによる支援が展開される．

次にパワーについては，利用者が環境との相互作用をとおして，内的もしくは他者や家族，地域，社会などの外的なシステムに影響を与え変化を生み出す，他者と共有可能な能力や資源であり，個人的，対人的，政治的な行為や活動に関連している．そしてフィードバックを含めた利用者自身の資源の要因となり得る特徴を保持している．このパワーに焦点化した支援では，利用者がパワーレス状況の改善や自己実現，生活の質の向上，社会変革を目指して，個人的，集団的，政治的な活動によりパワーを行使する過程を協働で展開する．

一方でその両概念の関連性をみていくと，ストレングスが個人的特性を備え，それを基礎とした対人関係的なパワーへの変容がみられる．また他方では，エコシステム視座と社会構成主義的見解による包括・統合的な perspective に基づくと，エンパワメント実践過程としての意味生成過程と状況変容過程の2側面に，ストレングスに通じる自省作用とパワーを導く機能的作用という特徴があることも理解することができた．

これらをふまえると，ストレングスとパワーの比較による特性は，表5のように指摘できるだろう．両者の特性は，当然ながら重なる部分があるなかで，より強調される側面を示したものである．まずストレングスは，社会構成主義的見解により，意味の側面から利用者の認識に関わる主観的な概念である．それは，対自的な利用者の自省によってはじめて自覚され，価値を生み出すのである．またそれは，対話によって生成され，利用者とソーシャルワーカー相互の了解によって確認される特性を保持している．一方でパワーは，エコシステム視座の機能という側面から，利用者の実際の行為に関わる客観的な概念である．それは，他者との関わりのなかで対他的に影響を与えることができるという利用者自身のコントロール（制御）感を示すものである．またそれは，環境に働きかける目的を備えて活動し，その成果によって確認される特性を保持しているといえよう．

すなわちソーシャルワークにおけるエンパワメント実践は，このストレングスとパワーの両特性をふまえ，次のような過程で展開されるであろう．まずソーシャルワーカーが利用者と共にその独自な意味を探求することから始める．そこでは両者の対話をとおして，既存の社会制度や文化からの抑圧への意識を高める一方で，より個人的な側面では利用者の能力や長所，そして環境的な側面で

表5　ストレングスとパワーの特性比較

ストレングス	パワー
意　味	機　能
認　識	行　為
主　観	客　観
対　自	対　他
自　省	制　御
価　値	目　的
対　話	活　動
了　解	成　果

は，豊富な社会資源などのストレングスへの認識を深めていくのである．そのことは，利用者にとってすでに自明なものとして客観化され，内在化されたことを利用者独自の意味から問い直すことにより可能となるのである．さらにそれは，主観的意味の外在化としての活動へと展開される．その活動は，パワーレス状況の改善や自己実現，生活の質の向上を目指す，状況変容に向けた個人的，集団的，政治的なパワー行動であり，社会システムの改善，変革へとつながっていく．その過程において利用者とソーシャルワーカーは，そのパワーを促進するために協働し，ミクロからマクロまでの環境への積極的なインターベンションやソーシャル・アクションに取り組むのである．

V．おわりに

ストレングス概念とパワー概念は，エンパワメント実践において重要な構成要素であり，比較可能な特性を保持することが理解できた．このようにストレングスとパワーを概念としてより明確化することを通じて，一連のエンパワメント実践過程を明らかにすることができるといえる．その意義は，エンパワメントに関する先行研究からも理解できる．例えばGarvinら（2004：58-59）は，活動を通じてパワーを働かせなくても，ストレングスやコンピテンスへの気づきが人々にエンパワメントの感覚を与え，パワーやコントロール感が増していると考えることにはつながるが，パワーやコントロール感を保持したということを意味しないと指摘している．すなわちエンパワメント実践では，主観レベルのストレングスを，実際に環境に働きかけるパワーへと変え，活動していく過程を包括した支援の条件整備が求められており，本研究でその前提として両者の特性を整理した点には意義があるといえよう．

以上のようにエンパワメント実践の構成概念としてのストレングスとパワーの特性を明らかにしてきたわけであるが，その特性を活かした実践過程の考察については，継続的な研究課題となる．そのため今後もエンパワメント実践過程への研究を深化させていきたい．なぜならソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の過程研究の深化こそが，理論と実践の乖離を払拭し，その意義を明確にすると考えるからである．

本研究は，JSPS科研費26380751の助成を受けたものである．

注：

1　家族を対象としたソーシャルワークでは，COS，診断主義，心理社会的アプローチ，問題解決アプローチ，1950年代以降の家族療法という発展のなかで，その焦点が主にクライエントの問題と欠陥にあてられていると指摘されている（Earlyら2000：121-122）．

2　次のような45種類の肯定的な行動を指摘している（Glicken2004）．
1）対処スキル，2）サポートネットワーク，3）過去の成功体験，4）現在の成功体験，5）文化的肯定感，6）問題解決スキル，7）道徳的発達のレベル，8）社会的責任の割合，9）問題解決への動機のレベル，10）教育上の成功体験，11）職業上の成功体験，12）対人関係スキル，13）身なり，14）コミュニケーションスキル，15）問題解決のために以前試みたこと，16）自己決定スキル，17）重要な他者との関係，18）スピリチュアリティと宗教心のレベル，19）健康的な生活習慣，20）問題解決のための選択肢を用いること，21）コントロール感，22）現在への見当識，23）自己の概念，24）金銭管理の知識，25）情緒的な知性，26）創造性，27）独自性，28）好奇心，29）親密さ，30）自律と自立への願望，31）信念，32）柔軟性，33）喜び，34）信頼，35）寛容さ，36）危険を引き受けること，37）回

復力，38）情熱，39）忍耐，40）決断力，41）ニードと要求を区別する知識，42）内省，43）多様性，44）精神的な平穏，45）洞察力

[3] 表1についてはSaleebey（1996：298），表2についてはNelson-Beckerら（2006：152），表3についてはEarlyら（2000：124）の表をもとに筆者が邦訳し作成した．

[4] ただし機能主義派は，機関の機能に基づくケースワークを重視し，社会環境に対する実践の拡がりについては一定の制限があった．そのため社会的パワーの解放にも制約があったと考えられる．

[5] 表4についてはMileyら（2013：104）の表をもとに筆者が邦訳し作成した．

[6] その他には，利用者の問題に関する定義を受け入れる，利用者の状況におけるパワー分析に関与する，特殊なスキルを教える，利用者のために資源を動員し，擁護することの重要性が指摘されている（Gutierrez 1990）．

[7] エンパワメントの主体としては，多様な利用者システムの形態が想定されるが，ここでは利用者として考察していく．

文献：

Adams, R. (2008) *Empowerment, Participation and Social Work*, Palgrave Macmillan.

Boehm, A. and Staples, L. H. (2002) The Functions of the Social Worker in Empowering : The Voices of Consumers and Professionals, *Social Work*, 47(4), 449-460.

Cowger, C. D. (1994) Assessing Client Strengths : Clinical Assessment for Client Empowerment, *Social Work*, 39(3), 262-268.

Dunlap, K. M. (2011) Functional Theory and Social Work Practice, Turner, F. J. ed., *Social Work Treatment : Interlocking Theoretical Approaches*, Oxford University Press, 225-241.

Early, T.J. and GlenMaye, L. F. (2000) Valuing Families : Social Work Practice with Families from a Strengths Perspective, *Social Work*, 45(2), 118-130.

Garvin, C. D., Gutierrez, L. M. and Galinsky, M. J. eds. (2004) *Handbook of Social Work with Groups*, The Guilford Press.

Glicken, M. D. (2004) *Using the Strengths Perspective in Social Work : A Positive approach for the Helping Professions*, Pearson.

Greene, G. J., Lee, M. Y. and Hoffpauir, S. (2005) The Languages of Empowerment and Strengths in Clinical Social Work : A Constructivist Perspective, *Families in Society*, 86(2), 267-277.

Gutiérrez, L. M. (1990) Working with Women of Color : An Empowerment Perspective, *Social Work*, 35(2), 149-153.

Gutiérrez, L. M. (1991) Empowering Women of Color : A Feminist Model, Bricker-Jenkins, M., Hooyman, N. R. and Gottlieb, N. eds. *Feminist Social Work Practice in Clinical Settings*, Sage Publications, 119-214.

Hasenfeld, Y. (1987) Power in Social Work Practice, *Social Service Review*, 61(3), 467-483.

Hepworth, D. H., Rooney, R. H. and Larsen, J. A. (1997) *Direct Social Work Practice : Theory and Skills*, Brooks / Cole.

Johnson, L. C. and Yanca, S. J. (2001) *Social Work Practice : Generalist Approach,* Allyn and Bacon.（=2004，山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房.）

Kemp, S. P., Whittaker, J. K. and Tracy, E. M. (1997) *Person-Environment Practice : The Social Ecology of Interpersonal Helping*, Aldine de Gruyter（=2000，横山穣・北島英治・久保美紀・湯浅典人・石河久美子訳『人―環境のソーシャルワーク実践―対人援助の社会生態学―』川島書店.）

久保美紀（2000）「第5章　エンパワーメント」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社，107-135.

Lee, J. A. B. and Hudson, R. E. (2011) Empowerment Approach to Social Work Practice, Turner, F. J. ed., *Social Work Treatment : Interlocking Theoretical Approaches*, Oxford University Press, 157-178.

McQuaide, S. and Ehrenreich, J. H. (1997) Assessing Client Strengths, *Families in Society*, 78(2), 201-212.

Miller, J. B. (1991) Women and Power, Jordan, J. V., Kaplan, A. G., Miller, J. B., Stiver, I. P. and Surrey, J. L. eds., *Women's Growth in Connection : Writings from the Stone Center,* The Guilford Press, 197-205.

Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2004) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.

Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2007) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.

Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2013) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.

Nelson-Becker, H., Chapin, R. and Fast, B. (2006) The Strengths Model with Older Adults : Critical Practice Components, Saleebey, D. ed., *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and Bacon.

西梅幸治（2011）「エンパワメント実践における perspective 特性の検討－エコシステムと社会構成主義に焦点化して－」『高知女子大学紀要』60，65-82.

西梅幸治（2012）「ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性－生活・支援・過程に着目して－」『高知県立大学紀要』61, 69-84.

Pinderhughes, E. B. (1983) Empowerment for Our Clients and for Ourselves, *Social Casework*, 64, 331-338.

Poulin, J. (2005) *Strengths-Based Generalist Practice : A Collaborative Approach*, Brooks / Cole.

Rapp, C. A. and Goscha, R. J. (2006) *The Strenghs Model : Case Management with People Psychiatric Disabilities*, Oxford University Press.

Saleebey, D. (1996) The Strengths Perspective in Social Work Practice : Extensions and Cautions, *Social Work*, 41(3), 296-305.

Saleebey, D. ed. (2006) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and Bacon.

Smalley, R. E. (1967) *Theory for Social Work Practice*, Columbia University Press.

Solomon, B. B. (1976) *Black Empowerment : Social Work in Oppressed Communities,* Columbia University Press.

Timberlake, E. M., Zajicek-Farber, M. L. and Sabatino, C. A. (2008) *Generalist Social Work Practice : A Strengths-Based Problem-Solving Approach*, Pearson.

Thompson, N. (2007) *Power and Empowerment*, Russel House Publishing.

Weick, A., Rapp, C., Sullivan, W. P. and Kisthardt, W. (1989) A Strengths Perspective for Social Work Practice, *Social Work*, 34(4), 350-354.

山口真里（2009）「ソーシャルワークにおけるストレングスの特性－類似概念との比較をつうじて－」『広島国際大学医療福祉学科紀要』5，65-78.